

白門経友会

就任のご挨拶

白門経友会 会長

経済学部長 篠原正博



昨年の十一月より、谷口洋志前学部長の後任として新経済学部長に就任した篠原正博と申します。白門経友会会長としての就任にもあたり、一言ご挨拶申し上げます。

学校法人中央大学は創立百三十周年を機に、昨年十一月に「中長期事業計画(Chuo Vision 2025)」を策定し、今後十年間の大学改革の基本方針を公表しました。

基本方針の第一は、「学部増設による総合大学としての魅力向上」です。総合政策学部の改組による政策系、国際系、ICT系、メディア文

化表現系などの複数学部の創設および健康・スポーツ系学部の新設が予定されています。第二は、「二大キャンパス体制の形成」です。多摩キャンパスの施設・設備充実によるグローバル・キャンパス化の推進、多摩の一部の文化系学部の後楽園キャンパスへの移転による文理双方の教育研究が展開されます。第三は、「グローバル化の推進」です。グローバル・プロフェッショナルの育成、学生の海外派遣拡大、留学生受け入れの拡大、教職員構成の国際化などがその内容です。第四は、「スポーツ振興事業」です。学生スポーツ選手

の育成強化によるスポーツに関する伝統の維持・発展が推進されます。このような全学的改革指針のもと、経済学部でもカリキュラム改善、グローバル化、学生支援、広報・ブランディング、高大連携などの視点から、教職協働でシステムの見直しを進めてまいりたいと考えています。

歓送会

見直しに際しては、経済学部OBの皆様にも是非お力添えを賜りたく存じます。ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

二〇一六年三月三日一八時より、経和会(経済学部教員の親睦会)が立川パレスホテルで開催されました。退任予定の先生方四名ならびに四月からの在外研究予定の先生方二名からご挨拶があり多数の出席者のもとでの歓送会になりました。



退任・新任教員のお知らせ

二〇一五年度退任教員

本年三月末をもって左記の三名の先生方が退任されます。長年にわたる経済学部へのご尽力を感謝するとともに今後の一層のご健闘をお祈り申し上げます。

- 片桐正俊 教授(財政学)
- 高橋雅足 教授(健康科学)
- 山本裕美 特任教授(環境経済学)
- 青木 慎 任期制助教(特別講義)

二〇一六年度新任教員

経済学部には四月から新たに左記の先生が着任する予定です。

- ドウマヤスアリヤン デラロサ
- DUMAYAS ARIANNE DELA ROSA (任期制助教)



本学事業計画・

二〇二五ビジョンについて

(本稿は、本学事業計画の意見
聴取への会員個人の意見です。)
實地、應用のキャンパス創生を
一、実学教育の社会的要請

本学が百三十年間で培ってきた社会的信用ならびに学問の蓄積、輩出した人的資源をふまえ、各学部間でプラットフォームとしてのビッグデータ活用に取り組むことが、二千年代に本学が達成すべき目標であると考えます。

ビッグデータを処理するハイパフォーマンスコンピューティングおよび人工知能研究の高度化により、大規模なデータを用いた各種の分析や判断、予測というものが可能となってきました。そこでは高等教育機関で展開される諸学問が理論的背景となることはもちろん、日常の経験や社会で蓄積されていることを実学としていかに研究・教育の現場に取り込むか、これからの大学はそのための仕組みを時代に合わせて構築していくことが重要であると考えます。附属の高校はじめ優秀な高校生による本学採択率軟化傾向があるとすれば、それは本学の伝統や建学の精神を大学内で實地應用する仕組み

の陳腐化が、この百三十年間で進んできたことを意味するのかも知れません。また高校生の採択判断が偏差値による序列化に大きく影響されている現状は、グローバル化を叫ぶ日本社会全体が、大きく反省すべき点であるともいえます。

二千年代に黎明期を迎えたビッグデータとその活用は、社会のあらゆる組織で必要不可欠な應用課題になりつつあります。そこには分析対象の背景となる学問や理論が必須です。しかし、ようやく実現可能となった技術革新の時期にあり、絶対的な学術不備・経験不足の状況にあります。

昨今、データサイエンティストという高度な技術者が注目されていますが、實地應用の観点から評価すれば、数学的な分析の専門家だけで進められる対象でないことは自明のことです。ビッグデータを中心とする社会基盤では、高度な経営手法が必要となります。そこに社会科学系の大学学部、しかも實地應用を得意とする伝統校への社会的要請や期待を読み取ることができません。すなわち、各学部の高度な理論研究にビッグデータをからませた、実務的な研究、教育・人材育成が、時代の要請

となつていのです。しかし、この特異点を認識できず、表面的な受験生人気獲得に終始する横並びの改革が、日本の大学で多いように思いますが、百数十年の歴史を有し重厚な基礎を持つ本学は、こうした例に加わることなく、自信と質実剛健の精神でもって、我が国に例のない大学改革を行うべきです。

人口減や高齢社会、日本をとりまく世界情勢をふまえて、よりグローバルで ICT 化された社会の構築が急務とされています。そのための本質的な部分は何なのか、見極める必要があります。二〇二五ビジョンでは、「實地、應用キャンパスの創生」を目指すことこそが、社会のニードへの責務であり、受験生および社会へのメッセージとしてたちに発信されるべきことだと考えます。

二、實地、應用のキャンパス

実現の要は、学外組織とのコラボレーションにあります。国や自治体、民間企業等の別に関係なく、各組織ともビッグデータを何の目的でどう構築するか、どのように分析や解釈を行うのか、予測や企画にどう活かしていくのか、暗中模索の状況にあります。このことは特に日本で顕著

であり、欧米先進国に比べて決定的に遅れていることが懸念されます。一九八〇年代、データベースを支配する者が世界を制すると言われたことがありました。限られた分野ではその通りのが起きた訳ですが、ビッグデータ社会では情報の粒度が当時と全く異なり、ビッグデータを活用しなければ支配する／しない以前に何も出来ない、という事態に陥ることが予想されます。

その結果、社会における競争のステージに立つことすら、ままならなくなる時代に入っています。しかるに、単なる数理学の側面だけではなく、各学問領域の理論を背景にした、ビッグデータの構築意図や活用方法の實地、應用研究が、どの組織でも必要となっているのが現実です。

これまで高等教育機関では、伝統的な学問体系に加え独自に生まれるか既存の体系から派生した学問の登場で、その学部構成にも変遷が生じてきました。第四次産業革命ともいわれるビッグデータ社会の到来においては、従来のような適応方法では時代に対応できません。すなわち、多くの学問領域において、その應用はビッグデータがからんだ実務的な適

用であり、そのための理論を意識した学問として既存のすべての学問がビッグデータの活用をふまえた体系として研究・教育されるべきなのです。そのために必要なことは、まず高等教育機関での対応です。

そこでは多くの学外組織とのコラボレーションにより、課題や手法の研究を、実際のビッグデータ構築や活用を行いながら進めていく必要があります。これは伝統的に行われてきた学部設置とは実現方法が異なり、既存の学部領域と被らない内容か否かでもなく、既存の学部・学問領域のなかにプラットフォームとしてそれぞれ取り込まれる性質のものとなります。この達成こそが「實地、應用のキャンパス」構築の実現に繋がります。

ある組織がその組織外でコラボレーション事業を行う際、ビッグデータの場は特にセキュリティ上の神経を使います。したがって、まずクリアされるべき点は、セキュリティの確保がなされる信頼性の確立につきまします。大学という機関が特にセキュリティ上、他と比べて信頼性が高いかという点必ずしもそうではありません。しかし多様な組織に対して公的な立場をとり得るとともに

に、ビッグデータ社会に直面する各学問の成長と實地への適用、教育や人材育成という観点から、大学こそがその役目を担うものと思えます。また、コラボレーション相手ができることから、特定の組織を利用することへの懸念が大学に起こり得ます。

この点は超えられる大きな壁といえますが、社会から強く信頼が得られるか、本学自身の力量と自信が試される問題と考えることが出来まます。すなわち、「我が国に例のない大学改革」を行う意思が試される試金石である、ともいえます。そして、以上のことは、人材を輩出し伝統を持つ本学だからこそ達成可能であると考えられるものです。

コラボレーションの現場をどう構築するか、その基盤はハイパフォーマンスコンピューティングや人工知能型スーパーコンピューターのインフラをもとに、各学部のワーキンググループから採択された学外組織から人的リソースの提供を受けて、コラボチームが組織されます。各コラボの研究対象はコラボ協議により決定され、参加組織から必要に応じてデータ等の提供も受け、ビッグデータとしての活用手法をその学問的側面から理論面の研究と合わせて行い

ます。大学が主導的立場をとりコラボを進めて行く工夫は、細かく設定していく必要があります。その一つとして、組織の本部機能が集中する都心部ではなく、郊外の多摩キャンパスを用いることは、コラボの学内統制や大学としての自主性の確立を促す点で有効な環境にあるといえます。また高度化された本学實地、應用のキャンパスは、都心郊外に設置された安全なデータセンターとしての評価にも繋がります。

社会の基盤施設として、数学的な分析手法や科学技術面においては、個々のコラボチームで確保する必要はなく共通のサービス体制を構築します。以上は学外組織と学内の研究者の視点からみたものですが、ここに在学生在が授業等で加わり、多角的な学習や研究に活かされます。ケースによつては、若者の価値基準や判断をふまえたビッグデータ分析が極めて貴重になることも想定されます。

本取組は既存の産学連携講座やサテライトオフィス、MO-Tオフィス、インターシップ、全学共通授業、FLP、学外授業協力者などの仕組みとは大きく異なるもので、實地、應用のキャンパスで中核的な存

在機能になります。その理由は、今後ビッグデータ社会における各学問領域にとつて、これは学問の恒久的な成長とともに必要不可欠な研究・教育の仕組みとなるためです。ビッグデータの学際的な研究には長い年月の積み重ねが必要ですが、この先十年、二十年という時間軸で、世界のトップとして注視される潜在力を持つのが中央大学だと思えます。また、いわゆる研究型大学、教育型大学という分類思想とも異なる、独自の大学のありかたをとるものとなります。そして、これを実現できない大学は、既存の価値観からくる消耗戦レースに勝ち残る戦略に頼らざるを得ません。

昨今、世界のトップ大学ランキングがいくつも出回っています。そこでは第四次産業革命を迎えつつある時代に即した評価項目があります。産業や文化、学問の蓄積に加え一億を超える人口基盤を持つ日本は、少なくとも新興諸国におけるそれとは大きく異なる優位性があるはずですが、その部分をしっかりとらえ、新時代の有力高等教育機関になり得る立場に日本の大学、特に中央大学は位置するものと考えます。

(K・T)

え、あの先生がシリーズ②

経済学部准教授 亀井伸治



経済学部でドイツ語を担当して
ります亀井と申します。わたくし
は、何より食べることが大好きで、
人一倍、各国の料理に関心がありま
す(きつと餓鬼道に堕ちているので
しょう)。しかし、自分の専門分野
の国ドイツでは、ソーセージ、ジャ
ガイモ、キャベツばかり食べられて
いるというイメージがあり、その料
理は、中華料理やフランス料理に比
べ、どうしても格下に見られがちで
す。実際にはドイツ料理には美味し
いものがたくさんあるのですが、伝
統的に食材や調理法の種類が多彩さ
を欠いているのも事実です。

さて、食事をめぐる書物に目を向
けてみてみますと、一般に美食家必
読の東西の古典とされているのは、
清朝の詩人、袁枚による『随園食單』
(1792)と、十九世紀フランスの法
律家ジャン・アンテルム・ブリア
サヴァランの『美味礼賛』(『味覚の

生理学』(1825)の二つというこ
とになるでしょう。美食はやはり中
国とフランスなのです。ところが、
これらほど有名ではありませんが、
ドイツ人が書いた美食に関する大著
も存在します。それは、十九世紀前
半のプロイセンの軍人で、退役後に
は著述家となったフリードリヒ・ク
リスティアーン・オイゲン・フォ
ン・フェルスト男爵という人の書い
た『食哲学あるいは食卓の歓びにつ
いての教説』(1852)という本です。
ひじょうな美食家でもあったこの元
貴族軍人は、食事をする楽しみを芸
術へと高めたいと真摯に考えていま
した。彼は食事の愛好家を「大食漢」
Gourmand、「食通」Gourmet、そ
して「食哲学者」Gastrosophの三
種に分類し、美食家は「食哲学者」
を指さねばならないとしました。
二巻から成る『食哲学』でフェルス
トは、自身の「食の哲学」に基づき、
古今の書物からのさまざまな引用を
文中にちりばめながら、いろいろな
料理や飲み物を詳細に考察していま
す。

この本はドイツでは決して忘れ去
られていません。一九二二年には、
ロマン主義の作家E・T・A・ホフ
マン研究の権威だったカール・ゲオ

ルク・フォン・マーセンによる「あ
とがき」が付いた覆刻版があり、ま
た一九七五年にも、料理や食材の楽
しい図版がいつぱい入った新版が出
されています。それに対して、いく
ら美食の達人だと言われても「どう
せドイツ人によるものだから」と、
フェルストの著作がドイツ語圏以外
の国々であまり顧みられていないの
は、不当であり(かわいそう)、惜
しい気がします。わが国では、『随
園食單』も『美味礼賛』も早くから
すぐれた翻訳があり、現在どちらも
岩波文庫で容易に入手して読むこと
ができます。他方、『食哲学』につ
いては、かつてドイツ文学者の前川
道介先生が十九世紀のドイツ文化事
情に関するご著書(『愉しいビーター
マイヤー』)の中で紹介されました
が、邦訳は残念ながらまだありませ
ん。時間があれば、いつか全訳でき
ればいいなと思っております。



編集後記

以前読んだあるアンケート調査
で、大学を卒業してから年数がたつ
た人を対象に、大学で学んだ科目で
役に立ったと思うものをあげてもら
うというものがありました。詳細は
忘れましたが、学生時代には何の役
に立つのか分からないと思っていた
ものが、さまざまな意味で役に立つ
ているのを後になって実感すること
があるそうです。普段は気にとめな
い食事の重要性を何かの機会に実感
したり、ごく普通の家庭料理を懐か
しく思い出したりするようなことが
もされません。今年卒業する人たち
も、中大での大学生活を何かの機会
に振り返り、ホームカミングデーな
どの同窓会の行事に参加してくれた
らと願っています。

(幹事長 濱岡 剛)

2016年3月10日 第60号
発行 白門経友会常任幹事会
編集 白門経友会編集委員会
〒192-0393
東京都八王子市東中野742-1
中央大学経済学部内
URL : www.wg-keiyukai.com
Fax : 042-673-3425